

- 1 教科等名 総合的な学習の時間
- 2 単元名 千川の未来創作プロジェクト

3 単元の目標

武蔵野市民科
資質・能力

○知識・技能の習得	地域の方へのインタビュー等を通して、学区域のよさや抱えている課題に気づき、その特徴について理解することができる。	C1
○思考力・判断力・表現力等の育成	地域活性化の観点から課題を見出し、情報を集め、整理・分析し、まとめたり表現したりすることができる。	C2
○学びに向かう力・人間性等の涵養	地域の一員であるという自覚をもち、地域をよりよくするために考え行動することができる。	B2

4 単元計画

小単元	ねらい	時数	主な学習活動・指導上の工夫	関連教科 関連団体（連絡先等）
小単元 ①	地域の一員であるという意識を高め、学区域について改めて想起し、学習課題をもつ。	3	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活は多くの地域の方々に支えられていることに気づき、自分たちも地域の一員であるという意識を高める。 ・学区域にはどのような施設、店舗等があるのか振り返る。 ・施設、店舗等の現状について想起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第4期学校教育計画 簡易版 ・学区域の地図
	インタビュー等を通して、地域の現状について課題をもって調べる。	4	<ul style="list-style-type: none"> ・地域巡りを行い、実際の現状について調べる。 ・地域の方にインタビューをして、現状を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域コーディネーター、学区域内にある企業、施設との連携
	地域の現状についてこれまで調べてきた内容を整理、分析する。	3	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の現状を整理・分析をする。 	
	地域の現状についてまとめ、保護者、地域の方々、友達に伝える。	6	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことや考えたことを、画用紙やプレゼンテーションソフト等にまとめる。 ・まとめた内容を発表し、交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者、地域の方々、地域コーディネーター、学区域内にある企業、施設の方々等
小単元 ②	地域にある課題を改善するために、小単元①の内容を基に学習課題をもつ。	2	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の現状を改善するために、「自分たちがやりたいこと」は何かを考え、課題を設定する。 ・学習計画を立てる。 	
	「自分たちがやりたいこと」のアイデアを出し、地域の方々と意見交流を行う。	4	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分たちがやりたいこと」は何か、アイデアを出し合う。 ・地域の方々を招き、出し合ったアイデアについて意見交流を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域コーディネーター、学区域内にある企業、施設との連携
	意見交流を基に得た情報を整理、分析する。	4	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分たちがやりたいこと」を整理し、実行の計画を立てる。 	
	「自分たちがやりたいこと」を実行する。また、単元を通して考えたことをまとめ、伝え合う。	10	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分たちがやりたいこと」を実行する。 ・活動を振り返る。 ・学んだことや考えたことを、画用紙にまとめる。 ・実践報告会、パネルディスカッションを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他学年の児童、保護者、地域の方々、地域コーディネーター、学区域内にある企業、施設の方々等

合計時数 36 時間

5 単元の振り返り

成 果（児童・生徒の変容等）	課 題
<p>地域コーディネーターの話から、担い手不足による行事存続の危機や「次世代につなぎたい」という切実な願いに触れ、児童の意識は「客」から「担い手」へと大きく変容した。これにより、自ら地域課題に関わろうとする「社会参画」への意欲と公共心が醸成された。また、探究活動におけるグループ協議では、意見対立時に安易な妥協や多数決に頼らず、互いの案の長所を分析・統合してよりよい解を導き出す「協働」的な合意形成力が育まれた。実践を通して表現力や対応力が向上し、他者への貢献を実感する「自己有用感」（自立）が高まった。</p>	<p>製作活動の長期化に伴い、目的意識が薄れ集中力を欠く場面が見られ、「自己管理」（自立）の面に個人差があった。また、一部の児童に負担が偏り受動的になる姿もあり、全員が主体的に関わるための役割分担など「協働」の在り方に改善の余地があった。児童自身が見通しをもって計画・実行する課題解決能力の育成や、意欲を維持する中間振り返りの工夫が今後の課題である。</p>